平成２９年度　岡山県立倉敷琴浦高等支援学校　学校評価書

校長　堀部　淑惠

１　自己評価

（１）生徒のキャリア発達を促す授業の実践・充実

①社会的・職業的な自立に必要な力を育てるための授業づくりに関する校内研修、研究授業、グループによる校内研究を実施した。

②卒業生アンケートを通じて、本校卒業生が考える社会的・職業的な自立を目指す上でのニーズを把握することで、授業内容の整理につながった。今後の授業づくりについて協議を深めている。

③本年度より、すべての生徒について、個別の教育支援計画へ合理的配慮を明記した。今後も配慮内容を確認し、柔軟に見直しをしていきながら支援を行っていく。

④技能検定指導者研修会に多数の教員が参加することで適切な指導を行うことができた。検定合格を目標にすることで自ら学ぼうとする意欲の高まりにつながっている。

（２）地域、関係機関と連携した進路指導の充実

①進路だよりやホームページで積極的に進路情報や学校の取り組みを発信することで、校内一体となる進路指導の充実を目指した。

②関係機関と密な連携を図り、組織的なアフターケアを行った。（就業・生活支援センター同行　41 社／ 49 社）

③ハローワーク、就労支援コーディネーターと連携を図りながら、新規職場開拓ができた。（新規に開拓した事業所：約 26 カ所）

④生徒が作成したナビゲーションブックを移行支援会議で活用することで、充実した協議を行うことができた。生徒を中心に捉えた支援ネットワーク構築ができている。

（３）楽しく充実した学校生活をサポートする体制の充実

①生徒会が地域貢献活動への参加を積極的に呼びかけ、主体的に活動に取り組むことで、多数の生徒が様々な地域ボランティアに参加することができた。

②新たな部活動を開設し、学校祭等で活動の成果を発表することができた。また、社会体育クラブや地域スポーツへの参加を促すことで、スポーツイベント等へ積極的に参加することができた。

③生徒理解を深め、カウンセリングスキルを高めるための教員研修を実施した。また、家庭環境を把握するためのチェック表を基に、生徒に寄り添った支援を心がけた。

④専門家による「コミュニケーションスキル向上」をねらいとした生徒向けの講演会を実施し、スマホ・ネット使用時での適切なコミュニケーションについて学習した。

（４）共生社会を推進するための支援体制の充実

①児島地区特別支援教育研修会を本校主催で実施することで「学び合う教師集団」として、保幼小中高の良い関係が構築できている。

②就労支援コーディネーターを中心に近隣の高等学校での就労支援（職場開拓、保護者・生徒と就労支援機関とのコーディネート等）を行った。高等学校に在籍する障害のある生徒の進路指導に対する意識が高まりつつある。

③民生委員児童委員協議会等の学校訪問を積極的に受け入れながら、障害のある生徒への理解啓発を図ることで、助け合い支え合って生きていく環境作りを目指している。

２　学校関係者評価委員名

重松　孝治　　（川崎医療短期大学　講師）
大島　美栄子　（倉敷障がい者就業・生活支援センター　所長）
片沼　靖一　　（琴東地区社会教育コミュニティ推進協議会　会長）
片山　一夫　　（児島産業振興センター　所長）
古家　訓史　　（児島ハローワーク　統括職業指導官）
小野　恭子　　（本校ＰＴＡ　会長）

３　学校関係者評価

（１）第１回学校関係者評価委員会

○重松委員
- 虐待防止に関しては、全生徒への面談を定期的にしながら虐待の有無を察することが大切になる。大きなトラブルが起こってから支援を始めるのではなく、そうならないよう本人や自分を守るために支援をしていかなければならない。カウンセリングスキルを高める取組を継続的にしていってほしい。
- ナビゲーションブック、サポートブックの取組については、高等支援学校の場合、本人にも自覚をさせていくという視点が大事になってくる。自己の障害や必要な支援を他者に説明する力は、就職に向けての必要なコミュニケーションのスキルになる。

○大島委員
- 企業につなぐとき、本人のこと、雇ってもらう場合の仕事内容に関すること、関わる機関などを在学中に知っておいてもらうことが大事。円滑な移行支援を実現するために、他の機関につなぐ必要のある生徒については、在学中、就労移行支援会議より前につながるようなしくみを組み込んでもらいたい。
- 本校は、結果（就職と定着）が求められる学校であると思うので、互いに協力しながら取り組んでいきたい。

○片沼委員
- バイクを含む運転免許があれば、職場選択の幅が広がるので、法規などの学科試験の内容については学校で取り扱ってもいいように思う。
- 虐待防止に関して、保護者対象の講演はよい取組だと思う。同時に、問題の対象となるような家庭は一般的に研修に参加しないことが多いので、そのような保護者への直接的な働きかけが大切となる。
- 倉敷市社会福祉協議会では、夏休み期間中に福祉やイベントに関わるボランティア活動募集しており、参加者からは精神的向上の面での感想が寄せられている。地域とのつながりや体験の場として有効なので、活用してみてはどうか。

○片山委員
- かつての終身雇用から労働に関わる社会情勢も変化し、我慢ができない若年層が増えてくる中で、一緒に考えて先を照らす、悩みがあれば一緒に悩みを解決したり、同世代の悩みなどについて細かく説明したりしてあげれば、また新たに頑張ることができるようになると思う。一緒に、同じ目線で話をしてあげるという時代になってきている。
- いじめに関しては、いじめる側にも何らかの理由があるから起きているのであり、互いに深くコミュニケーションできるような能力が少しずつでも高まってくればと思う。話し合いができる、コミュニケーションができるチャンスを教員が与えるということも大事なことだと思う。

○古家委員
- ハローワークとして協力できることは、新規の職場開拓が一番だと思う。それぞれのハローワークが連携を取りながら情報提供を行っていきたい。
- 障害者雇用に関する理解を深める観点から、秋ごろ児島地区の障害者雇用率未達成企業による学校見学ができないものか所内で模索をしている。

○小野委員
- 親としてこの場に参加させてもらい、大変勉強になった。
- 我が子はこの学校に入学でき、友達もでき、とても楽しく生活している。また、実習では、たくましくなると同時に、就職することの大変さを感じることができたように思う。

（２）第２回学校関係者評価委員会

○大島委員

・アフターケアで協力できているとの報告を受け、良かったと思うとともに、それがより自然にできるようになればと思う。

・ここ数年の卒業生の卒業後の問題が届いていない気がしているが、その分安定してきていると思っている。支援を必要としないくらい安定している方もいるとは思うが、何かあれば学校やセンターに連絡が入ると思うので、そういうときにきちんと対応できるように、資料や情報を職員間で共有していこうと思っている。

・移行支援に際して、家庭の問題等、何かあったときの対応をしやすくするための家庭情報を教えてもらえる仕組みがあると、関係機関として良いと思う。

○片沼委員

・「何でも教師に相談するのはどうか」と感じることがあると思うが、人に自分のことを表現するということが就労後においても役立つので、個人的に良いのではないかと思う。

・定着率の問題については、その世代や学年の雰囲気など関係している。そういう面から考えると、他の学校と比べても、あまり変わりがないのではないか。

・他校に比べ、ここの学校の生徒は全般的には礼儀正しいと感じている。言葉だけではなく、心や気持ちのこもった挨拶ができるようになることが生徒指導の面からも大事だと思う。また、世の中の変化の中でもしっかり生きる力を付けることが大事。

○片山委員

・定着率については、一般的には３年が一つの目安。３年で辞めた理由のほとんどは、給料が安いなどの社会や会社を理由にしたものである。そういった意味では、しっかりとアフターフォローをしていることは良いことだと思う。

・支援学校としての特徴を出せるようなコンサルティング力やコーチング力、生徒とのコミュニケーション力などを高め、集めた情報を教職員全員が共有していろいろな意見が出し合えるといったところまでレベルアップしてもらいたい。

・学校が社会や会社と連携していくことについて、是非、学校としてのサポートの方針を示しながら人事担当者や社長などと意見交換に臨めば、会社としても何らかの意見が出ると思う。そういった機会を大事にしてもらいたい。

・生徒にはいろいろな逆風はあると思うが、自分たちが社会の中で琴浦の卒業生として頑張っていくというパイオニア精神を少しでも持ち、頑張ってもらえたらと思う。

○古家委員

・ハローワークとして一番協力できるところは、実習先や就職先の提案。児島地区以外についても、直接他地区のハローワークに相談いただければ構わないので、引き続き遠慮なく相談しに来ていただきたい。

・定着については、辞めて相談に来る卒業生の中には、家庭の問題がある人もいる。逆に、家庭のサポートがしっかりしている人は、比較的定着率も高いように感じる。家庭のことについては、なかなかサポートできないところがあるが、将来生徒がしっかり自立できるようにしていきたい。

○小野委員

・我が子の様子を見ていると、学年の違いによる雰囲気や友達関係、言葉のやり取りの違いを感じており、そのことからも家庭が大事と思っている。親として、これからも相手を思いやる心が大事ということを教えていかなければいけないと感じている。

（３）第３回学校関係者評価委員会

○重松委員

・倉敷琴浦高等支援学校のいじめ対策については、通常の学校でも見られるいじめといじりの線引きの困難さとともに、知的障害を対象とする特別支援学校ならではの難しさがある。知的障害を有する場合、本人が意識していなくても周りの人が見て問題と感じられることについて、人権教育の観点から今後もいじめとして扱っていかなければいけない。

・ナビゲーションブックに関わる取組については、障害診断を中学校に入学後に受けた生徒がいる学校の実態から、まだ自分の診断も含めて琴浦に入学すること自体を受容ができているかどうかといった生徒がいることも予想される。１年生からの取り組むかどうかについては、慎重に進めていく必要がある。

○大島委員

・順調に就職件数が増え、離職数が減っていることは良い傾向である。居住地と勤務地が離れているケースがあるが、それは本人の希望なのかどうか気になる。公共交通機関での移動を考えると、苦労しながら通勤する人がたまにいるのでそこが心配である。

・卒業後、本人と親御さんとの関係が良くなく、関係機関に伝えたケースがある。早いタイミングで情報提供をして協力を仰ぐことも必要である。

○片沼委員

・いじめはどこでも起こりうる。小さい頃のいじりがエスカレートしていじめとなることもある。人権の視点から考え、人を尊重するという意識を高めることが大事である。

・ナビゲーションブックは自分発見につながり大変良い取組である。生徒同士で発表し合う場を設けることで、互いに向上し合うことでもできると思う。自分の苦手なことを書くということは、子どもにとっては苦痛だと思うので、苦痛にならない工夫をしてほしい。

○片山委員

・様々な会社、業種に進まれるということは良いことである。職種は清掃などの現場が主にはなると思うが、今はどこの会社も現場の部門は不人気であり、不足をしている。しかし、会社を支えているのは現場である。それぞれの人が持ち分をしっかりすることが会社の業績がつながるので、学校としても組織の中での現場の大切さを確実に生徒たちに伝えてほしい。そして、与えられた仕事を、偏見を持たず、自信を持って取り組んでほしい。

○古家委員

・ハローワークとして企業や実習先の紹介が中心となっている。２年次の求職登録では、保護者や生徒の希望について、時間的なことだけでなく先々の保険などについてお話ができるようになればと思う。また最近は、先生方からこんな話を本人や保護者にしてほしいということを事前にアドバイスをいただけるので、ハローワークとしてもそれがいいように思う。

○小野委員

・１年間、大変勉強させていただいた。次は３年生になるので、就労に向けて生活面もしっかり見ていきたい。１年間ＰＴＡ会長をさせていただき、学年を超えた保護者の方との連携、つながりを今後持っていきたいと思う。

４　来年度の重点取組（今後の方向性）

○キャリア発達を促す授業実践（新学習指導要領実施に向けた学習内容検討の継続）
○自己理解の促進
○組織的アフターケアの充実